連作7首

44 関根一華◇地下鉄に乗っていた頃
45 入瀬翠◇写譜
46 迫田智◇あまつみかぼし
47 間宮きりん◇しずかすぎる心臓
48 小野みのり◇身と瀬
49 錆多ねじ◇あかいさんかく
50 當山壮大◇snowは雪の味がして
51 平井奈々◇水鳴り
52 深見あす香◇わんわんと波紋のように

連作15首

54 大村咲希◇二回目の冬
56 佐々木遥◇灯火と蝶
58 谷村行海◇現代人たち
60 渡辺優太◇2014/2015(New Town/Numbers)
62 青井硝子◇回っていたい
64 榛葉純◇火傷するには程遠い
66 村本有◇鯨
68 堂那灼風◇ラスト
70 永井亘◇すぐに映画がありますように
72 松本宗久◇生きてゐた顔
74 山崎有理◇フォークロア
76 渋谷美穂◇硬質のなかの熱量

連作30首

78 谷口一平◇ヰタ・スペクラリス
84 結樹双葉◇鳥影が射す

地下鉄に乗っていた頃◇関根一華

大きめの傘を買ったの　語彙だけで生きていけない私のために
美容師の彼がやさしくなだめても「かまわない」って裁ち切りばさみ
振り向けば雨上がりばかりまばゆくて物語にはなれなかったね
むきしつな悪意にふれて誰かしら、泣くが自動詞なんて言ったの
幼子とわけあう手持ち花火にて静かに花を殺してる夜
窓際で亡霊に隔てられている　机に伏してそとを見ている
丘の上展望などはなくてただ風通しだけがやけに良いのだ

写譜◇入瀬翠

いちめんのみどりはひかり半身へきっさきのごと魚影のゆらぐ

しなやかな四肢のかさなる花群（はなむれ）に火がうつりゆく葬列とする

天国　はるかにのどぶえはみずうみを沈めてまばゆい地獄

紫陽花のなずき持つひと夕暮にむきだしのまま佇んでいる

おとうとは焼けた死体の夢を見る砂漠の海の眼の色をして

慈雨と云う、慈雨に石榴はひびわれて影の街路へ星をころがす

伽藍までゆるやかな汐みちゆけば鱗にこぼる夜へとねむる

あまつみかぼし◇廹田智

隣り合う花屋の前を走り抜け金の林檎を届けなくては
父なしの卵を割れば目玉二つ銀のボウルはしんと光って
缶入れに仕舞った指環の鉄錆が口にうつる金星の夜
アラームは切ってしまおう鼻白む朝が永久(とわ)に訪れぬよう
ガジュマルの一番大きい葉の色は君より少し若い緑
両足を曲げて眠れば海底まで北斗星に運ばれて行ける
とりどりの嘘を照らして踊るのだ時計回りのミラーボール

しずかすぎる心臓◇間宮きりん

薬指よりもセロリが愛しいといったのはうそ　頬を寄せない
どうだっていいことばかり真四角に瞳をとらえる証明写真
少女たちは吐息で道路の白線を世界の果てって呼んだ
夏の朝。炭酸水で飲んだのはバファリン・あくび・〈また会いましょう〉
どの青もひとしく海が隠れてて走り書きした電話番号
結べない点をそれぞれ集めたらパレードしよう月の終りに
チョコレート・アイスクリーム明日にはこの莢を出て微笑んでいる

身と瀬◇小野みのり

誤って鳥の群れにでもなりそうな夕べの痩身を引きとめる

河岸という道を自らあふれ出る花よどうして讃えればいい

ふくよかに浮いた静脈ほの白い腕の途中であなたに潜る

瀬に指をふくませながらどこへでも行けるしなやかなからだ冷えゆく

守れても約束程度　川面にはさかのぼりゆく魚が透けて

空ならばなおひそやかに閉めて出る郵便受けによわい反照

最後かもしれぬ別れを暮れがたに影はちぎれんばかりにのびて

※「かんざし」創刊号掲載作を加筆・修正

あかいさんかく◇錆多ねじ

数日で消えちゃうような痕だってわたし一生忘れないから
片方は埋まっているのに気づかないふりをしたまま贈ったピアス
しがみつく肩越しに見た窓のそと場末の夜景あかいさんかく
きいろより危険ないろと知りながら見すごしてしまうだらしない脳
3、2、1でいなくなりますとガラスの靴に詰めたつまさき
冷え切った舌が押し込むさよならで息ができないことがうれしい
あの部屋のプラズマテレビで見た通り午後からは雨　傘はあの部屋

snowは雪の味がして◇當山壮大

英字チョコsnowは雪の味がしてだけどつめたくないねと不思議
ぼくときみ初めてキスしたそのそばで捨てられていく競馬新聞
いい加減静かにしろよ赤林檎ナイフをあてたら夜なのだった
月へ行き帰ってくれば頭上には花の冠　ぼくらは変わる
繰り返す　生まれなかった猫たちがそこらを闊歩している夜が
安心をひとつのシーンに閉じ込めるためにリテイクリビングふたり
記念日にふたり話を切り出せばビルが崩れてまた二十年

水鳴り◇平井奈々

菜の花を光のなかで切ったとき名前を持たない水がこぼれる
いつまでも鱗みたいな汗をかく子どもをやめることはできない
ゆっくりと降ってるような日々だった分水嶺となってあなたは
自らを抱きしめるとき二の腕は水槽に似た冷たさをする
都市のごと沈む足先いつのまに記憶とわたしの境界がない
気づいたら水底だったあの人がまばたきをする音が聞けない
さざ波をまた立てたくて手を振ったさよならをしたみたいになった

わんわんと波紋のように◇深見あす香

夜半深く爪のかたちを確かめる銃声はもう聞こえなくなる
指で剝く桃の薄皮　かたち無きあなたの胸の邪気をしずめる
ゆったりと蝋が溶けてくもう今日が終わってしまう東京タワー
海岸に脚浸しおりわんわんと波紋のように薄まるあなた
うずくまる獣の背中思わせる　海は荒くてやさしい呼吸
あふれ出す湯気にまみれて見つめおり大根茹でる真白き時間
目覚めたる少女ゆっくり伸びをする初めて翅をひろげたように